

教育学部生を対象にした運動部活動の 意義に関する社会学的研究

— 中学時代の運動部活動の経験に着目して —

盤所 真*・大隈 節子**

**The sociological study about significance of sports clubs
conducted to students of faculty of education:
Focus on experience of sports clubs in junior high school**

Makoto BANJO and Setsuko OKUMA

要 旨

本稿の目的は、大学の教育系学部所属する学生の中学時代の運動部活動の経験が、大学生になった現在の運動部活動に対する意義にどのような影響を与えているのかを明らかにすることであった。中学時代に運動部活動を行っていた学生にアンケート調査を行い、当時の活動について具体的に (i) 競技歴・競技成績、(ii) 練習環境、(iii) 取り組みの様子、(iv) 顧問の指導形態、(v) 人間関係という過去の要因が、現在の運動部活動の意義に与える影響を検討した。その結果、(i) 競技歴・競技成績、(ii) 練習環境、(iv) 顧問の指導形態の3つの過去の要因との間に有意な関連性が認められた。

I. 諸言

人々が心身ともに健康で文化的な生活を営んでいくために、運動やスポーツの担う役割は大きい。特に青少年にとっての運動やスポーツは、心身の健全な発達を促すものとして推奨されている。日本では青少年が日常的に運動やスポーツを実施する場として、学校で行われる運動部活動が挙げられる。文部科学省による報告(2009)では、中学生の64.1%(男子74.8%、女子52.9%)が運動部活動に所属しているという。このことから運動部活動は多くの青少年に対して運動やスポーツを行う機会を提供していることがわかる。2008年に告示された中学校学習指導要領には、部活動について「スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること」と記載されており、部活動は学校教育において重要な位置づけであることが

示されている。さらに運動部活動について、「スポーツの楽しさや喜びを味わい、豊かな学校生活を経験する活動であるとともに、体力の向上や健康の増進にも極めて効果的な活動である」と記載されている。それ以前に告示された学習指導要領には部活動に関する記述はなく、部活動と学校との関わりが今まで以上に強く求められていると言える。

このように学校教育の一環として位置づけられている運動部活動であるが、近年では顧問教員による体罰等の行き過ぎた指導が問題として浮上しており、指導者の運動部活動に対する適切な指導のあり方について早急な見直しが進められている。

2013年に文部科学省が作成した「運動部活動の在り方に関する調査研究報告書(2013)」においては、指導者の経験だけに偏らない、科学的な根拠また社会的な良識に基づいた指導内容・方法の重要性、さらに生徒との信頼関係構築や心理的フォローなどにも留意した教育的指導の必要性などが具体的にまとめられて

* 三重大学大学院教育学研究科

** 三重大学教育学部

いる。

特に、中学校期は多くの生徒が運動部活動を通してはじめて本格的な競技スポーツに関わるようになる可能性も高いことから、この時期の運動部活動へのかかわり方が卒業後の活動の継続・非継続、また更に長いスパンでその後のスポーツへの関わりにも大きな影響を及ぼすことが予想される。このことから、特に中学校期の運動部活動は、教育の一環としての正しい指導理念や活動の意義に基づいた、より良い運動部活動の経験を経ることが大切であると言えよう。

そこで本研究では、中学時代の運動部活動の経験が、大学生になった現在における運動部活動への意義にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的とした。特に、今回の調査対象者は教育系大学に所属している学生であり、その多くは、将来教員となって、部活動の顧問となる可能性も高い。この点からも、特に教育学部生を対象に運動部活動の意義について明らかにした本研究の調査結果は貴重な資料になるものと言える。

II. 仮説の設定

仮説：過去（中学時代）の運動部活動における経験は、教育学部生の現在の運動部活動に対する意義に影響を及ぼす

III. 方法

1) 運動部活動の意義に関する調査の概要

① 調査対象

三重大学教育学部・教育学研究科に所属している学生及び院生で、中学時代に運動部活動を行っていた者 200名

（英語教育コース、学校教育コース、技術・ものづくり教育コース、社会科教育コース、数学教育・情報教育コース、保健体育コース、理科教育コース、その院生）

② 調査時期

2015年12月下旬～2016年1月上旬

③ 調査方法

質問紙によるアンケート調査を実施した。コース代表者に質問紙を配布してもらい、回収可能な分は回収してもらい、残りは質問紙回収場所を設けて回収した。質問紙は無記名とし、対象者のプライバシーが守られるようにした。

④ 調査項目

調査項目は大きく以下のように分けられる。

- ・対象者の基本的属性について

- ・対象者の中学時代の所属運動部活動について
- ・対象者の中学時代の練習環境について
- ・対象者の中学時代の取り組みの様子について
- ・対象者の中学時代の顧問の指導形態と部活動の在り方について
- ・対象者の中学時代の人間関係について
- ・対象者の現在考える運動部活動の意義について（自由記述含む）

本調査においては、現在、運動部活動の意義をどのように考えるかについて、過去の要因として以下の5項目に分けて検討していく。

【過去の要因】

- (i) 競技歴・競技成績
- (ii) 練習環境
- (iii) 取り組みの様子
- (iv) 顧問の指導形態
- (v) 人間関係

⑤ 調査対象者の属性

- (i) 性別

表1 性別

	人数(人)	割合(%)
男性	50	68.5
女性	23	31.5
合計	73	100

- (ii) 年齢

表2 年齢

	人数(人)	割合(%)
18歳	7	9.6
19歳	19	26.0
20歳	17	23.3
21歳	18	24.7
22歳	9	12.3
23歳	2	2.7
24歳	1	1.4
合計	73	100

- (iii) 運動部活動・運動系サークルに所属の有無

表3 運動部活動・運動系サークルに所属の有無

	人数(人)	割合(%)
所属	53	72.6
無所属	20	27.4
合計	73	100

(iv) 中学時代の運動部活動の種目内訳

表4 中学時代の運動部活動の種目内訳

	人数(人)	割合(%)
< 個人競技 >		
陸上競技	13	17.8
ソフトテニス	8	11.0
卓球	6	8.2
剣道	3	4.1
水泳	3	4.1
硬式テニス	2	2.7
柔道	1	1.4
バドミントン	1	1.4
小計	37	50.7
< 集団競技 >		
軟式野球	11	15.1
バスケットボール	10	13.7
サッカー	8	11.0
ソフトボール	4	5.5
バレーボール	2	2.7
ハンドボール	1	1.4
小計	36	49.3
合計	73	100

中学時代の所属運動部活動は、「3人以上で行う競技を集団競技」として今回は定義した。

2) 統計処理

統計処理には IBM 社製 SPSS Statistics Ver.22 を用い、 χ^2 検定を実施した。有意水準は 5%未満とした。

3) 回収率および回答率

配布した質問紙 200 部のうち、73 部の有効回答を得た。回収率は 36.5%であった。そのうち自由記述で 50 部の有効回答を得た。回答率は 68.5%であった。

IV. 質問紙調査の結果

χ^2 検定を行った結果、過去の要因 (i) 競技歴・競技成績、(ii) 練習環境、(iv) 顧問の指導形態の 3 つの要因と、現在運動部活動をどのように考えるかにおいて有意な関連性が認められた。その他においては有意な関連性は認められなかった。以下に関連性が認められた項目についてみていく。

1) (i) 中学校時の競技歴・競技成績と現在の運動部活動の意義

競技歴・競技成績に関連する項目の中で、中学時代に行っていた部活動が個人競技か集団競技かと、現在運動部活動をどのように考えるかとの間に有意な関連性が認められた (図 1、 $p < 0.05$ 、カイ 2 乗値: 4.106)。図 1 より中学時代に個人競技の運動部に所属していたと回答した人で、現在運動部活動を「アスリート養成の場」と考えている人は 57.1%、「教育の一環」だと考えている人は 42.9%であった。また、中学時代に集団競技の運動部活動に所属していたと回答した人で、現在運動部活動を「アスリート養成の場」と考えている人は 32.3%、「教育の一環」だと考えている人は 67.7%であり、両者の割合に有意な差がみられた。

自由記述の内容をみると、個人競技の運動部に所属していたと回答した人の記述には、「競技力向上や人格・人間関係形成」、「自分を高める」、「精神力を高める」、「物事はなかなかうまくいかないということを理解する場」、「自分とのたたかい」といった内容の記述があがっていた。

一方、集団競技に所属していたと回答した人の記述には「集団としての人間形成 (協調性・礼儀など) も学習する場」、「チームとしての意識を身に付けることで良好な人間関係を築くための協調性やコミュニケーション力をつけるための場」、「協同意識の養成」といった内容があがっていた。

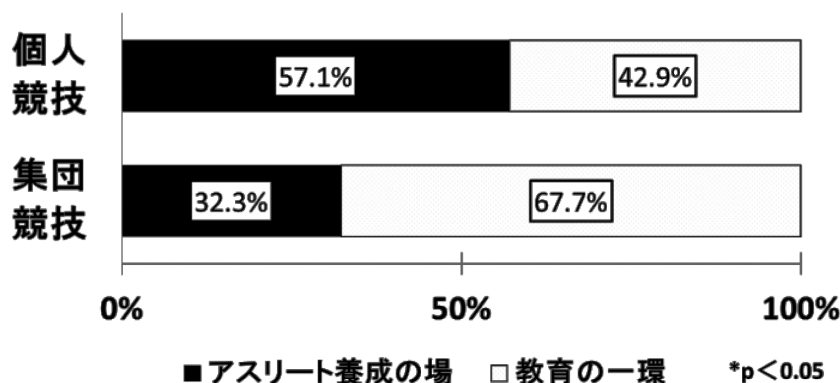


図1 競技形態と運動部活動をどのように考えているかの関係

2) (ii) 中学校時の練習環境と現在の運動部活動の意義

練習環境に含まれる、練習環境満足度と現在運動部活動をどのように考えるかとの間に有意な関連性が認められた(図2、 $p < 0.01$ 、カイ2乗値: 7.436)。図2より、中学時代に練習環境に満足していたと回答した人で、現在運動部活動を「アスリート養成の場」と考えている人は36.0%、「教育の一環」だと考えている人は64.0%であった。中学時代に練習環境に満足していなかったと回答した人で、現在運動部活動を「アスリート養成の場」と考えている人は75.0%、「教育の一環」だと考えている人は25.0%で両者の間に有意な差がみられた。

自由記述の内容をみると、練習環境に満足していたと回答した人は、「生涯スポーツへの誘導」、「どんな形であれ、生涯付き合っていけるスポーツとの出会いの場」、「部活動を通じて生きていく上で必要な力をつけられること」、「授業だけでは学べない社会性を身に付ける役割も担っており、教育活動において重要な位置づけである」といった記述がみられた。

一方、練習環境に満足していなかったと回答した人の自由記述を一部抜粋すると、「最後までやり通すことでの達成感であったり、精神力も得られる」、「具体

的な目標へ努力する場」という記述がみられた。

3) (iv) 中学校時の顧問教員の指導形態と現在の運動部活動の意義

中学時代の運動部活動は指導によってどのようなものであったかと、現在運動部活動をどのように考えるかとの間に有意な関連性が認められた(図3、 $p < 0.01$ 、カイ2乗値: 8.940)。図3より、中学時代運動部活動は「アスリート養成の場」と回答した人で、現在運動部活動を「アスリート養成の場」と考えている人は75.0%、「教育の一環」だと考えている人は25.0%であった。中学時代運動部活動は「教育の一環」と回答した人で、現在運動部活動を「アスリート養成の場」と考えている人は33.3%、「教育の一環」だと考えている人は66.7%であった。

自由記述の内容をみると、中学時代の運動部活動は「アスリート養成の場」と回答した人は「自分を高める」、「技能の向上だけでなく、人間性としての発達に非常にかかわってくる」、「努力した思い出」といったものがあがっていた。

一方、中学時代運動部活動は「教育の一環」と回答した人の自由記述を一部抜粋すると、「チームワーク

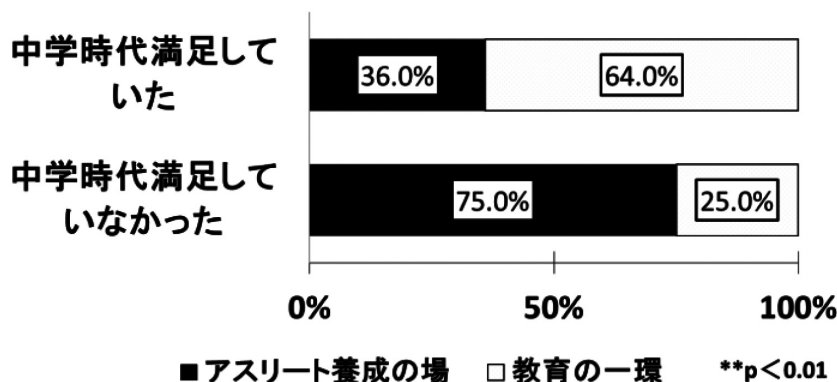


図2 練習環境満足度と運動部活動をどのように考えているかの関係

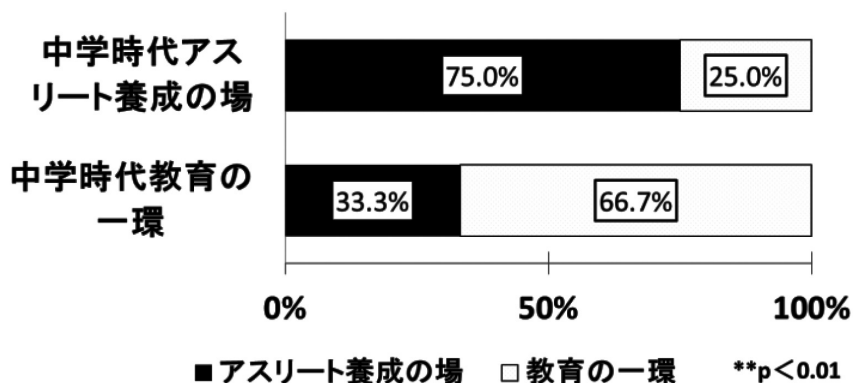


図3 中学時代と現在で運動部活動をどのように考えているかの関係

の育成」、「協力することや仲間を思いやることができる」、「人間関係（顧問との関係・先輩・後輩との関係）を学ぶ場であり、社会への適応力を養う場」というものがあがっていた。

V. 考察

上記1)の結果から、個人競技を行ってきた人は運動部活動を「アスリート養成の場」として捉える傾向があり、集団競技を行ってきた人は運動部活動を「教育の一環」として捉える傾向にあることが明らかとなった。

また自由記述の内容からも、個人競技を行ってきた人は、運動部活動の意義を「競技力向上や精神力を高めるといった自己をどれだけ高めていけるか」というところに求めている内容が多くみられ、「負けずに強くなるためには…」という、結果を出すためのアスリート養成の考え方につながりやすいことが明らかになった。一方で、集団競技を行ってきた人は、運動部活動の意義として「集団やチームの中でよりよい関係を築いていくことができる」というような記述が多くみられ、集団の中での振舞い方を学んだりするという「教育の一環」としての考え方につながりやすいことが明らかになった。

上記2)の結果から、中学時代練習環境に満足していた人は運動部活動を教育の一環として捉える傾向があり、中学時代練習環境に満足していなかった人は運動部活動を「アスリート養成の場」として捉える傾向があることが明らかとなった。

また自由記述からも、練習環境に満足していた人は、「運動部活動に対し、生きていく上で必要な力を身につけられる場所である」といった生涯スポーツとの関連で意義を捉えている記述がみられるなど、運動部活動の意義を広く「教育の一環」として捉えている可能性が明らかになった。一方で、練習環境に満足していなかった人は、「最後まで目標に向けてあきらめない精神力が得られる」といったところに意義があると考えており、競技者として望まれる素養を身につけるための「アスリート養成の場」として捉えやすい傾向がみられた。

上記3)の結果から、中学時代運動部活動を「アスリート養成の場」と考えていた人は現在も運動部活動を「アスリート養成の場」として捉える傾向があり、中学時代運動部活動を「教育の一環」と考えていた人は現在においても運動部活動を「教育の一環」として捉える傾向があることが明らかとなった。

自由記述の内容をみると、中学時代の運動部活動は「アスリート養成の場」だったと回答した人は、現在

においても運動部活動は「自分を高めることや努力とといったところに意義がある」といった内容の記述がみられ、人間性の発達といった記述も一部みられるものの、競技者として結果を出すために必要な個人的資質を身につける「アスリート養成の場」としての考え方につながりやすいことが推察される。一方で、中学時代運動部活動は「教育の一環」と考えていた人は、現在においてもチームワークや協力、人間関係といったところに意義があると考えており、「教育の一環」としての部活動の意義を重視する傾向がみられた。

これらのことから、中学時代の運動部活動においてどのような部活動に所属していたか、練習環境満足度はどうであったか、運動部活動は指導によってどのようなものであったかということが、大学生の現在の運動部活動の意義に対して影響を与えている傾向が明らかになった。また、このことは、これらの要因の在り様によって、運動部活動が「アスリート養成の場」につながりやすくなることを示唆している。

佐藤（2013）は、どれだけ勝敗の結果を出したかという結果にばかりこだわるのではなく、社会に出た後、生涯にわたる豊かなスポーツライフの継続に向けた資質や能力の育成につなげていくことが運動部活動における重要な意義の1つであると述べている。過度なアスリート養成の場として運動部活動を捉えるのではなく、教育の一環として実施していく中で、体力の向上や健康の増進、人間形成などの豊かな人間性を育むことにつなげていき、中学時代の経験というものがその後約10年にわたって考え方に影響を与えることを自覚し部活動の指導をしていくことが重要だと考える。

VI. 仮説の検証

今回の調査結果から、仮説は一部分において証明された。

VII. まとめと今後の課題

本調査では、大学の教育系学部所属する学生の中学時代の運動部活動の経験が、大学生になった現在において、中学校での運動部活動に対する意義にどのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的とした。調査によって、中学時代の運動部活動でどのような部活動に所属していたか、練習環境満足度はどうであったか、運動部活動は指導によってどのようなものであったかということが、大学生である現在運動部活動をどのように考えるかに対して影響を与えることが示唆された。

しかし本調査では、標本数が十分ではなかったため

母集団の傾向を把握するには不十分な分析結果が多かったことや、自由記述を抜粋して検討したものの、あくまでも抜粋であり記述全体を分類するなどができないまま検討していったこと、同じ群でも逆の内容のことを述べている対象者もあり、一概に考察のように言い切れないことも確かであることは、本調査の限界である。今後はこれらの点を踏まえて調査を行っていくことで、より全体の傾向を把握するのに貢献していけると考える。

引用・参考文献

- 運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議（2013）運動部活動の在り方に関する調査研究報告書～一人一人の生徒が輝く運動部活動を目指して～
- 佐藤豊（2013）学校運動部活動の教育的意義を再考する．現代スポーツ評論（28），pp.60-74.
- 文部科学省（2008）中学校学習指導要領
- 文部科学省（2009）平成22年度文部科学白書
- http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201001/detail/1312141.htm 2016/2/8 アクセス